



Title	上下顎歯牙接触関係に関する研究 : 下顎後退位における歯牙接触関係について
Author(s)	中村, 公雄
Citation	大阪大学, 1972, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/30640">https://hdl.handle.net/11094/30640</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	なか 中	むら 村	きみ 公	お 雄
学位の種類	歯	学	博	士
学位記番号	第	2506	号	
学位授与の日付	昭和47年3月25日			
学位授与の要件	歯学研究科歯学臨床系 学位規則第5条第1項該当			
学位論文題目	上下顎歯牙接触関係に関する研究 ——下顎後退位における歯牙接触関係について——			
論文審査委員	(主査) 教授	下総 高次		
	(副査) 教授	河村 洋二郎	助教授 三好 作一郎	講師 作田 守

### 論文内容の要旨

上下顎歯牙接触関係は、補綴物の作製、咬合調整、不正咬合の診断を行なう上に、非常に重要である。特に、下顎後退位における接触関係は、咬合干渉の問題と関連して重視されている。しかし、天然歯列の咬合接触関係を正しく記録し、種々の下顎位における接触部を比較できる方法が確立されていないために、上下顎歯牙接触関係についての具体的な知見がはなはだしく不足している。

そこで本研究は、下顎後退位における具体的な接触関係を明らかにすることを目的とし、いわゆる正常咬合者を対象として、臨床において下顎位の基準として利用されている下顎最後退位の接触部、および被験者自身ができる限り下顎を後退させた位置での接触部を調べ、それらと歯牙位の基準とされている咬頭嵌合位の接触部との関係を比較検討した。

各下顎位の咬合接触部は、新しく考案した塗料—規格写真法により調べ、咬合接触部を印記した口腔内歯列の規格写真と咬合局面を記入した模型歯列の規格写真を透明フィルムにトレースし、それらを重ね合わせるにより、各下顎位における接触部の関係を比較した。さらに、従来使用されている hinge locator および flag を改良した描記装置を利用して、各下顎位間のズレの量を下顎頭部において測定した。なお、咬頭嵌合位における対合関係から、各被験例を片側ごとに、咬頭鼓形空隙関係 (A型とする) と咬頭小窩関係 (B型とする) に分けた。そして接触部位は咬合面区分法により表示した。すなわち、頬側咬頭頂を近心より I、Ⅲ、V、舌側咬頭頂を II、IV、とし、各咬頭の頬側、舌側、近心側、遠心側に各々 B、L、M、D、の付号をつけ、さらに近心舌側、遠心舌側、近心頬側、遠心頬側に LM、LD、BM、BD の付号をつけた。また、近心辺縁隆線は M、遠心辺縁隆線は D、近心窩は MP、中央窩は CP、遠心窩は DP とした。その結果の概要はつぎのごとくであった。

(1)咬頭嵌合位と被験者自身で可能な下顎後退位との間には、最大0.95mm、最小0.10mm、平均0.67±0.23mmのズレがあり、咬頭嵌合位と下顎最後退位との間には、最大1.45mm、最小0.45mm、平均0.89±

0.25mmのズレがあった。

(2)下顎最後退位においては、切歯・犬歯の接触はなく、第1小臼歯は13.3%、第2小臼歯は16.6%、第1大臼歯は46.6%、第2大臼歯は96.6%接触していた。高頻度接触出現部(25%以上)は、A型の場合、上顎では第1大臼歯のⅡB、第2大臼歯のⅡBDであり、下顎では第2大臼歯のⅠLD、ⅢLD、B型の場合、上顎では第2大臼歯のⅡBであり、下顎では第2大臼歯のⅠLであった。

(3)被験者自身で可能な下顎後退位においては、切歯・犬歯は6.7%、第1小臼歯は50.0%、第2小臼歯は56.8%、第1、第2大臼歯は100%接触していた。高頻度接触出現部(25%以上)は、A型の場合、上顎では小臼歯のⅡBM、第1大臼歯のⅡB、ⅡBD、第2大臼歯のⅡBD、ⅢLMであり、下顎では小臼歯のⅠLD、第1大臼歯のⅢL、第2大臼歯のⅠLD、ⅢLDであった。B型の場合、上顎では小臼歯のⅡB、第1大臼歯のⅡB、ⅣB、第2大臼歯のⅢLD、ⅡB、ⅡBDであり、下顎では小臼歯のⅠL、第1大臼歯のⅠL、ⅥL、第2大臼歯のⅠL、ⅢLであった。

(4)咬頭嵌合位においては、上顎切歯は58.3%、犬歯は83.4%、下顎切歯は50.0%、犬歯は80.0%接触しており、小臼歯、大臼歯はすべて接触していた。臼歯の高頻度接触出現部(50%以上)は、A型の場合、上顎では第1小臼歯のⅡBM、ⅠLM、ⅠLD、D、第2小臼歯のⅡBM、ⅠLD、M、D、第1大臼歯のⅡBD、ⅡB、ⅠLD、ⅡLD、第2大臼歯のⅡBD、ⅡLD、M、ⅠLDであり、下顎では第1小臼歯のⅠLD、ⅠBM、ⅠBD、第2小臼歯のⅠLD、ⅠD、第1大臼歯のⅢL、ⅠBM、ⅢBM、第2大臼歯のⅢBM、ⅢBD、ⅢLD、ⅠLDであった。B型の場合における高頻度接触出現部は、上顎では第1、第2小臼歯のⅠL、ⅡB、第1大臼歯のⅢL、ⅡB、ⅥB、ⅡBD、第2大臼歯のⅠL、ⅡBD、ⅢLD、ⅡB、ⅢL、ⅡLMであり、下顎では第1小臼歯のⅠL、ⅠB、第2小臼歯のⅠL、ⅠB、ⅠBD、第1大臼歯のⅢB、ⅠL、ⅢL、ⅥL、第2大臼歯のⅠL、ⅢL、ⅠB、ⅡB、ⅢBであった。

(5)咬頭嵌合位と下顎後退位における歯牙接触部の関係はつぎの如くであった。被験者自身で可能な下顎後退位の場合は、その接触部が咬頭嵌合位の接触部の範囲内に含まれる場合が最も多く、ズレがあっても両下顎位における接触部の属する同一咬合局面内にあり、両者を合わせて、上顎で91.0%、下顎で93.2%をしめた。接触部のズレが、両下顎位における接触部の属する同一咬合局面外におよぶ場合、および接触部が全く別の所に現われる場合はごくわずかであった。下顎最後退位の場合は、その接触部が咬頭嵌合位における接触部の範囲内にある場合と接触部のズレが両下顎位における接触部の属する同一咬合局面内にある場合とを合わせて、上顎で69.6%、下顎で83.5%をしめた。そして接触部のズレが両下顎位における接触部の属する咬合局面外におよぶ場合と全く別の所に現われる場合とを合わせると、上顎で30.4%、下顎で16.5%であった。

以上の研究により、下顎後退位における具体的な歯牙接触部、さらに、それらと咬頭嵌合位における歯牙接触部との関係が明らかになった。

## 論文の審査結果の要旨

本研究は下顎後退位における具体的な歯牙接触部、さらに、これらと咬頭嵌合位における歯牙接触部との関係を明らかにしたものである。本研究によって、咬合調整や咬合再構成など歯科補綴治療に際し考慮すべき上下歯牙接触関係に新たな知見を加えたことは、歯科臨床上その意義がきわめて深い。よって、本研究者は歯学博士の学位を得る資格があると認める。